

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月20日現在

機関番号：33902

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2018

課題番号：24730487

研究課題名（和文）健康の社会的決定要因をめぐる質的ライフコース研究

研究課題名（英文）Qualitative life-course study on social determinants of health

研究代表者

加藤 佳代（鈴木佳代）（KATO-Suzuki, Kayo）

愛知学院大学・総合政策学部・講師

研究者番号：90624346

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：地域在住高齢者20名に対し、人生を振り返る形式でインタビューを行い、その語りの内容を分析することで、高齢期の健康維持生成に重要であるとされるソーシャル・キャピタルがいかにして形成されているか、また人生の中でどのように変化したり、健康状態や健康行動に影響を与えたりしているかを明らかにした。高齢期のソーシャル・キャピタルには青年期や壮年期の就労経験や人とのつながりが影響しており、健康な高齢期のために社会参加しやすい社会環境づくりを工夫していく重要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢期の健康維持生成を考えるうえで、青年期・壮年期の経験や社会関係が重要であること、しかしながら高齢期における心理社会的健康やソーシャル・キャピタル（人とのつながり）が健康に与える影響力は過去の不利以上に大きいことは、生涯にわたる健康や、健康政策を考える上で大きなポイントとなる。また、今回の研究で作成した「人生年表」は、情報やポイントを共有しながら語りを進める上で大きな役割を果たした。今後のライフコース研究のみならず、福祉や医療の分野においても利用価値が高いと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Twenty community-dwelling older people participated in a life-course interview. Their narratives were analyzed focusing on the formation of social capital, an important factor for the promotion and maintenance of health in older ages. This study also analyzed changes in social capital over a lifetime and their impact on health conditions and health behaviors. Overall, the study revealed the influence of work experience and personal connections in young- and middle-age on social capital in older ages, which indicates the significance of easy-to-participate social environments for healthier old age.

研究分野：社会学

キーワード：ライフコース 健康 高齢者 ソーシャル・キャピタル 社会参加

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 超高齢化社会を迎えた日本では、個人の QOL 保障と社会政策の両面から、高齢者の健康を維持・増進することが重要課題となっている。そうした中で、社会経済的格差が健康状態に結びついているという健康格差論が多数の学術領域で注目を集めており、社会科学の見地から健康格差の問題を解明することが求められていた。

(2) 研究者は研究開始当初、勤務先であった日本福祉大学健康社会研究センターが実施した大規模調査データを用いて、高齢者の健康の社会的決定要因に関する分析を行っていた。そこで、インタビュー調査により得た質的なライフヒストリー分析により、主要なライフイベント・社会経済的地位・社会的サポートの三者が持つ長期的な関係を分析し、高齢期の健康状態を生成する過程を明らかにしたいと考えに至った。

2. 研究の目的

本研究では高齢者のライフヒストリーの質的分析を通じて、主要なライフイベントの前後での社会的サポートや社会経済的地位の変化と、それらが高齢期の健康状態につながる道筋をライフコース的視点から明らかにすることを試みた。特に、健康の維持生成において重要であることが近年明らかになってきたソーシャル・キャピタルの概念に着目し、変容可能な行動としての社会参加に影響を与える要因の分析を中心に、高齢期のソーシャル・キャピタルがライフコースの中でどのように位置づいており、社会的役割や周囲との支え合い(社会的サポート)との関連においてどのように高齢期の健康状態に影響するかを分析することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 大規模量的データによる仮説生成と量的研究

先行研究に基づく仮説生成に加え、高齢期の健康と社会的要因に関する数万人規模の情報を有する日本老年学的評価研究(JAGES)のデータ分析から、仮説の生成・検証や関連要因の絞り込みを行い、質的データと併せて比較検討する混合研究法を用いた。

(2) ライフヒストリーインタビューによる質的研究

2012年10月から2014年2月にかけて、20名の高齢者(65歳~82歳)を対象にライフヒストリーインタビューを実施した。参加者ごとに2回のインタビューを実施し、1回目には人生年表を用いたライフヒストリーの聞き取り、2回目には主要なライフイベント前後の変化や、ソーシャル・キャピタルに関連する事柄について掘り下げた聞き取りを行った。

(3) 分析

インタビューにより得られた情報はすべて文字起こしを行い、継続的比較法(佐藤, 2008)を用いて分析した。

4. 研究成果

(1) 大規模データの分析により、青年期から壮年期にかけて就労経験がない高齢女性は、就労経験を有する高齢女性とくらべ、有意に高齢期の社会的グループ参加率が低く(40.5%対51.3%)、社会的交流が少なく(「友人の家を訪ねる」「家族や友人に助言をする」「病人を見舞う」「若い人に自ら話しかける」の4項目において、該当2項目以下が20.3%対13.6%)、友人に会う機会がないことが多く(8.9%対5.4%)、友人数が少ない(2人以下が20.9%対16.6%)。逆に10人以上は30.4%対39.4%)傾向があった。さらに、年齢や等価所得、世帯構成や教育年数、健康度自己評価、うつ傾向を調整しても、就労経験がない女性はこれらの社会的交流が少ない傾向があった。したがって、就労経験の欠如が高齢期の社会参加を不活発にしてしまう可能性があり、こうした女性に地域の中で交流する機会を提供していく必要があると考えられる。

(2)(1)の研究成果で得た「青年期・壮年期の就労経験が高齢期の社会参加につながる」という知見は、単に本人の社交性・外向性の高さにより説明される可能性もある。そこで、インタビューで語られた社会的グループへの参加について、それ以前のライフコースにおける就労経験や社会的グループとの関係から分析し、経路の解明を試みた。学卒後の人生の3分の2以上の期間就労していた「就労型」の高齢女性8名は、組織的集まりへの参加・非組織的な友人知人がともに多く、6名は職場での友人・知人と現在でもつながりがあり、4人は職場でのつながりや経験が現在の社会的グループ参加に影響していた。青年期・壮年期の就労が高齢者女性の社会的グループ参加につながる経路として、仕事を通じて社交性が高まり、知り合いが増え、職業的スキルを生かして高齢期にも活動できるの3つが見いだされた。一方、「専業主婦型」女性4名は全員が結婚退職しており、職場関係の友人が不在だけでなく、友人が少ない傾向があり、それ以外の社会的グループにもほとんど参加していなかった。その原因と考えられるエピソードには本人や家族の健康状態、家族親族との緊密な関係があった。こうした高齢女性が新たに加わりやすい場づくりが地域の中に必要であると考えられる。

(3) 高齢期の社会参加に影響を与える要因のひとつとして、地域における居住年数が挙げられていることから、居住開始年齢が高齢期の社会参加の程度や形とどのように関連しているかを分析した。その結果、居住開始年齢が高いほど、社会的グループに参加していない、社会的 IADL (手段的日常生活動作) が低い、友人と会う頻度が低い、友人数が少ない、近隣との付き合いが希薄であるといった社会的交流の少なさを示す傾向が見られた。これらは年齢・等価所得・世帯構成・教育年数・現在の就労状況・主観的健康観・うつを調整しても有意であった。さらに、居住開始時期の遅さが社会参加や社会的交流にもたらす負の影響は、男性よりも女性で大きいことが示された。一方で、居住年数が短くても、趣味やスポーツの会、後期高齢者では老人会の参加率が比較的高く、こうした集まりが居住年数の短い住民にとってより包摂的なものになっていくことが期待される。

(4) 健康な高齢期を迎えるためには、それまでの時期を健康に過ごすこと、あるいは逆境を乗り越えて健康を維持・回復することが必要である。壮年期の逆境的ライフイベントの乗り越えには、児童期・青年期の乗り越え体験の積み重ね、壮年期の仕事がもたらすアイデンティティや社会的サポート、稼得が影響していることが明らかになった。また、社会経済的地位が低くとも、外部資源をうまく活用することで乗り越えが可能であり、そうした乗り越え体験が自己肯定感につながっていることが示された。

(5) 高齢期の健康に関連する社会的要因の基礎分析を行った。2つの理論仮説として、有利・不利の累積理論(社会経済的地位と健康との関連は、人生を通じて累積していくため、若い時に不利を負った者は加齢とともにますます不利になり、有利な立場にあった者はますます有利になっていく)と健康生成論(健康はストレス対処能力 SOC やソーシャル・キャピタルの豊かさにより維持生成される)を挙げ、これらが支持されるか否かを検証した。その結果、男性の場合は社会経済的地位が高いほど若年期・高齢期とも健康状態が良い傾向があり、現在の社会経済的・心理社会的・ソーシャルキャピタル要因を調整してもなお、若年期の社会経済的不利がライフコース的影響を持つことから、有利/不利の累積理論が支持された。これに対し、女性は若年期・高齢期ともに社会経済的地位が中位~高位でほぼ同程度であり、若年期の社会経済的地位の影響はその後のライフコースの中でほぼ消失していた。一方、心理社会的要因やソーシャルキャピタル要因は、若年期・高齢期の社会経済的要因よりも高齢期の健康と強く関連しており、健康生成論は男女ともに支持された。したがって、ライフコース的に過去のネガティブな影響があっても、高齢期の心理社会的健康や社会的つながりを強化していくことで、高齢期の健康状態を維持生成していくことができる可能性が示された。

参考文献

佐藤郁也『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社、2008

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

鈴木佳代「地域への居住開始時期と高齢期の社会参加」第88回日本社会学会大会 2015.9.19
早稲田大学戸山キャンパス

鈴木佳代「高齢者女性のライフコースにおける就労と地域集団参加」第87回日本社会学会大会 2014.11.23
神戸大学文理農学部キャンパス

Kayo Suzuki. Do older women without work experience participate less? : Lifecourse analysis using the JAGES data. XVIII International Sociological Association World Congress of Sociology, July 16, 2014. Yokohama, Japan.

鈴木佳代「壮年期の逆境的ライフイベントに関するライフコース研究：高齢者のナラティブから」第86回日本社会学会大会 2013.10.13
慶応大学三田キャンパス

鈴木佳代・中川雅貴・近藤克則「社会経済的・心理社会的・ソーシャルキャピタル要因と高齢期の健康」第85回日本社会学会大会 2012.11.3

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。